

逆宇宙ハンターズ 5

暗黒の夜明け

朝松 健



ソノラマ文庫

ソノラマ文庫<401>

あんこく　よ　あ
暗黒の夜明け

落丁本，乱丁本はお
とりかえいたします

昭和62年12月30日　初版発行

昭和63年 3 月10日　3 版発行

著　者　朝　松　健

© Ken Asamatsu 1987

発行人　広　橋　敏　栄

発行所　株式会社　朝日ソノラマ

東京都中央区銀座4-2-6

第2朝日ビル（〒104）

振替番号　東京2-40311

電話番号　03-563-6021～3.

印刷所　株式会社光邦

製本所　光和製本株式会社

ISBN4 - 257 - 76401 - 5

暗黒の夜明け

朝松 健

朝日ソノタマ

日本財団支援

目次

プロローグⅠ	逆位置	5
プロローグⅡ	正位置	9
第一章	魔山潜行	15
第二章	鬼域冥行	40
第三章	天魔夜行	76
第四章	冷殺鬼行	110
第五章	妖神凶行	142
第六章	正邪拮抗	181
第七章	五星壮行	217
エピローグ		231
邪教・立川流の謎	比良坂天彦	237
あとがき		251

プロローグⅠ 逆位置^{リバース}

その時、本栖湖^{もとすこ}の湖底より虚空^{こくう}めがけて、暗黒光^{ブラック・ライト}が噴きあがった。

光柱は周囲に繰り広げられた、恐るべき異景を遮る^{さへぎ}黒大理石の巨大な円柱のように、空中高く伸ばされていく。――その向こうでは、すでに四本の光柱が虚空聖山を支えていた。すなわち、山中湖の底より伸びた黄金の光柱。河口湖からの眩^{まばゆ}い白光。西湖からは眼を射^いる真紅の光。さらに精進湖^{しょうじこ}の湖底より伸びあがっているのは、超自然的な青い光柱。そこに、いま、本栖湖の黒柱が加わり、空中高く浮遊する巨大な岩塊の全容が明らかにになった。

黒富士は暗黒光を受けとめるや、今度は、実在する霊峰と合体すべく、ゆっくりと地上に向かつて降下しはじめた。

この驚愕^{きょうがく}すべき光景を見つめる二人の男たちもまた、空中に浮遊していた。ひとりは見事な銀髪を強風になびかせた老人。その顔には特徴というものが皆無である。老人の傍らに浮かんで、眼を見張っているのは十七、八歳の少年だった。

「春夫くん。どうやら地上では〈二面夜叉門^{にめんやしやもん}〉が開かれてしまったらしいな。きっと、あの白鳳坊^{おうぼう}の一派が黒富士に入山したのだろう」

眼下^{がんげ}遙か、漆黒に広がる青木ヶ原樹海のそこからオレンジ色の炎が噴きあがっている。それを呆然^{ぼうぜん}と見下ろす淡島春夫^{あわしまはるお}の頭脳に、彼の導師^{グル}とも呼ぶべき不死者、尾瀬泰吉^{おぜたいきち}老人の思念

が伝えられた。

「……すると……もう手遅れなのですか？ 妖術僧たちが入山し、世界は魔界に沈むというのですか？」

春夫がそう思念を返すと、尾瀬老人は笑う波動を発して、首を振った。

「はっはっ、そう簡単にはいかん。五つの影を受け容れるからには、黒富士は五つの光にもその懐を開かねばならんのだ。そうしないことには、真の意味での物理次元への侵攻は不可能なのだ」

「……？」

尾瀬老人の抽象的な説明を理解しかねて、春夫が沈黙していると、不意に銀色の霊的衝撃が青木ヶ原の一角より轟いた。ズンとした波動に空中浮遊した二人の体が、一瞬バランスを崩すと同時に、春夫の脳裡にひとりの老僧の顔がパツと閃いた。

恵比須さまのような丸い愛敬のある顔に眼鏡をかけた、見ただけで心が安らぎそうな名僧である。

尾瀬老人の思念が響いてきた。

「天台宗の名智識、宗碧海師だ。老師の象徴するものは『水』。意味するものは『喜び』。産出力。『友情』。『式典』……。五感では味覚を表す。色は銀。魔術においてはアパスと呼ばれている世界に属しておる」

続いて、また同じ一角よりスカイブルーの霊的衝撃が伝えられる。今度は髪をショートカット

トにした二十八、九の女の顔が浮かんだ。彼女には春夫も見覚えがあつた。国立がん研究所付属病院で言葉を交わしたことがある。——宗華子。碧海師の娘で、合気道の達人だ。

「宗華子。象徴するものは〈風〉。意味は「健康」「論争」「議論」「トラブルの解決の鍵」。色は青。ヴァユと呼ばれる世界に属している。五感では触覚……」

次に伝わってきたサイキック・ショックの色は真紅だった。脳裡に浮かんだ顔は、春夫にとつて最も懐かしい人物のものである。日本人離れした容貌にふてくされたような表情を浮かべた青年。スニーカー坊主、吉水都英だ。

「都英くんの象徴するのは〈火〉。力」「精力」「闘争」そして「名誉を守る鍵」だ。君に教えたように、彼こそは逆宇宙に対する最大の闘士なのだ……。色は燃えあがる炎の赤。視覚を司るテジャスの世界に属しておる」

そして、春夫の足元で地獄が口を開いた。いや、すでに彼は空中高く浮かびあがっていたのだから、この表現は適切ではなからう。むしろ、彼の肉体と魂とが、かき消すように闇に呑まれた、と言うべき感覚に近かった。

「——やはりな。春夫くん、君は〈空〉なのだ」

尾瀬老人は濃い紫色の靈的衝撃で五メートルほど後退つてから、独りごちた。

「意味するものは、「靈的な事象」「魔術的問題」「靈的攻撃への防衛」……。聴覚を司るアカシャの世界に属する」

最後に、尾瀬老人の姿が影にまぎれるように消えていった。黄色の靈的衝撃が周囲の大気を

ゆらめかした。それは「地」を象徴する色であつた。象徴するものは「ビジネス」「研究」「金銭」「実務的な諸問題の解決策」——。五感では嗅覚。魔術的にはプリティヴィと呼ばれる世界に属している。

碧海師の「水」に始まり、尾瀬老人の「地」で終わる五つの元素エレメントの移動。それは西洋魔術においては、「風」の五芒星ごぼうせいの「召喚」しやうかんを意味するものだった。

そう——自らの狂気の拡大にあえぐ表層意識は、五人の人物を「召喚」して、無意識の闇へと送り放つたのである。闇を打ち消す光の因子。あるいは、狂気を鎮静させる理性的象徴。だが、闇の懐深くには、闇そのものの権化ごんけと呼ぶべき者どもが、彷徨ほうこうしはじめていた。

プロローグⅡ ライト・ウェイ・アップ 正位置

「こちら、第二搜索隊の大村。現在、大室山の裏手です。本部、どうぞ」

レインジャー部隊のひとりがハンディトーカーに口をつけて、乾いた声で言った。鳴沢氷穴入り口に設けられた本部よりの返答を待つ彼の背後から、激しい嘔吐おうとの音があがった。鳴沢村の消防団員のひとりが、周囲の惨状の凄まじさに、ついに戻ってしまったのだ。

「こちら、本部。どうだ、現場にたどりついたか？」

まるで眼前に上官が立っているかのように大村隊員は首を振り、口腔の奥にからんでくる生唾なまを呑みこんでから、やっと声を絞り出した。

「いいえ、まだです。現場はもう少し先なのですが……死体を多数、発見しました。——どうぞ」

ハンディトーカーのスピーカーから再生された声が無機質に響いた。

「多数の死体？ ジャンボ機から投げ出されたものか？ どうぞ」

「いいえ。それが……」

と、大村隊員は言い淀んで、周囲に転がる五つの死体を見下ろした。三体は肉体の一部を残して灰と化している。黒スーツの袖や黒い革靴を履いた片足、あるいは苦悶くもんの様子で歪んだ手首などから女のものとおぼしかった。いずれも十代半ばから二十代初めと思われる。

他の二体は三十代前半と思われる屈強な男の死体で、着ているものからはどんな職業なのか、まったく判別できない。二人の男は鋭い刃物で刺し殺されているようだった。

「どうも違うようです。互いに殺し合って相討ちになったみたいで——どうぞ」

「……」

ハンデイトーキーの向こうで、司令部の人間は息を呑んだようだ。しばらく沈黙してから、やっと大村隊員に話しかけてきた。

「弾痕——ピストルで撃たれたような跡はないか？ 火焰放射器で死体が灼かれてるんじゃないのか？ どうぞ」

「三体は灼け死んでますが……普通の炎じゃありませんね。まるで火葬されたみたいです。他の二体は先端の尖った刃物で刺されたようで……どうぞ」

「——さっき、神座洞窟の方から樹海に入った一隊が大量の射殺死体を発見したんだ。洞窟付近にはロールスロイスが乗り捨てられていた。どうもジャンボが墜落する前の晩に、青木ヶ原で暴力団の抗争でもあったらしいな。——そっちの死体の服装は？ どうぞ」

「三体はほとんど灰になっっているので分かりませんが、黒いスーツに黒のタートルネック・セーターを着ていたようです。あと二人ですが、こちらはごくありきたりの背広姿です。どうぞ」

「黒スーツの方は、神座方面の死体の仲間だな。あっちの死体も同じ服装だ。……ほかに何か異常は？ どうぞ」

「ええと……」

大村隊員は視線をゆつくりと上げていった。二メートルほど前方に白い陶器のかけらが大量に散乱している。どうやら陶製の女性の裸像がその辺で転倒し、砕け散った跡かと思われた。大村は何故か、陶片の山からつい眼をそらしてしまう自分に気づいて、心の底で舌打ちした。『妙なところに妙な物があるからって、何をオレはビクついているんだ？ ただの白陶の破片じゃないか』

そう思いつつ背後を振り返った。後方では七人のレインジャー隊員と五人の消防団員とが手分けして、死体と灰を一カ所に集めている。

「――別にこれといったものは」

と、大村がハンディトーカーに話しかけた時だ。不意に左手の草藪くさやぶが大きく動いて、暗い樹林の蔭かげから一人の大男が現れた。

「あつ、いま何者かが出てきました。追って連絡します。以上!!」

大村隊員は早口でまくしたてると、ハンディトーカーのスイッチを切り、樹海から現れた大男に駆け寄った。

大男は複数の人間を見て安心したのか、力ない笑みを浮かべて両膝ひざをつく。大村と消防団員二人が大男の体を支えた。

「おい、しっかりしろ!! 大丈夫か!？」

大男はマウンテンパーカーのフードの奥で小さくうなずいた。身長一八〇センチ前後、がっ

しりとした体つきである。広い肩の上の頭は理知的な顔立ちをしており、黒縁眼鏡の底の細い眼が憔悴しきっていた。

「水を……水をください……」

大男の言葉に、消防団員のひとりが肩から下げた水筒を差し出す。大男は蓋を開け、水筒の中味を一息に飲み干した。

「どうして、こんなところをうろついている」

「昨日のジャンボの墜落現場を見たか？」

「いったい、青木ヶ原で何があつたんだ？」

「灰になつてゐる黒スーツの死体は何者なんだ？」

大男を取り囲んだ男たちの口から、そんな質問が一齐に吐き出された。誰もが皆、不安を覚えていたのだ。JAW二〇三便の墜落前夜に何か——人智の及ばぬ何か、異常な事態が、ここ青木ヶ原で展開したに相違ない。この地点に来るまでの間、彼らは妖気の残滓をたつぷりと吸いこんできたのである。

「う……墜落は……ぼくも見ました。多分、ここから西北に二キロほど行つた地点でしょう、ジャンボの落ちたのは……」

大男は水筒を戻しながら、言葉をゆつくりと絞り出した。

「そうか！ よし、本部に連絡をいれよう」

大村隊員は再びハンディトーカーを持ち上げた。それを虚ろな眼で見上げる大男の鼻先に、

キャビンの箱が突き出された。初老の消防団員が煙草をすすめていた。

「う……すみません。いただきます……」

そう言つて、大男は箱からキャビン抜き、口にねじこむ。

「なあ、あんた……名前は何だ？」

消防団員は大男のくわえた煙草に火を点け、親切な口調で訊いた。

「う……名は、中島です。中島省蔵。……仕事は……雑誌社に勤めています」

「そうか。中島さんっていうのか。で、青木ヶ原に取材なんか来てて、迷っちゃったのかい」

「う……まあ、そんなとこです」

中島はそう言葉を濁して、眼を前方に集められた死体に向け、眉をひそめた。——灰になつた三人は威明派の妖術僧たちで、殺したのは灼天尼。その技は苦止縛得宗妖術（燔業）。二人の男の死骸は白鳳坊派の妖術僧で、威明側の頭脳である白隠坊が放つた罫索に倒された。そんな事情を話したところで、到底一般人に理解されるとは思えなかつた。

「一昨日の夜九時ごろだったか、富士五湖から凄い光が噴き出した。あれを見て胆をつぶした次の日に、ジャンボの墜落だ。——やっぱり前兆つてのはあるもんだなあ」

自分もキャビンを一服しながら、消防団員は中島に言つた。

「う……あれは前兆なんかじゃない……狂気の発作が吹き出したんだ……」
と、中島は口のなかでつぶやいた。

「そして……まだまだ発作は続く……」

「えっ!? いま、なんて言っただね」

消防団員が訊き返すと、中島は青ざめた唇を歪めて、絶望的な微笑を浮かべた。

「富士が……」

「えっ、富士? 富士がどうしたね?」

「う……富士が狂った、と言ったんですよ」

中島はか細い声で囁き、太い溜息をおとして両眼をつぶった。隣で煙草をふかす消防団員は中島の言葉の意味をはかりかねて、きよとした顔で彼の横顔を見つめ続けた。

やがて、彼は嫌でも理解するだろう。

今年がどんな年であつたか、を。

今年は「災厄の年」。あらゆる狂気と恐怖とが無気味な妖魔の衣裳をまとつて、現実世界を蹂躪する年なのだ。考えられる限りの虐殺と悪夢が、強烈な酸毒で地球を冒す年なのである。

いまは十月十一日。

「災厄の年」を乗りきるには、まだ八十二日もの日数が必要とされていた。

第一章 魔山潜行

R-1

濃霧の底で男は目覚めた。

鼻をつく薬物臭と、かすかな獣の体臭を孕んだ霧が、男の視界を覆っている。男は激しい眩暈を振り払いつつ、純白のスーツに包まれた身を起こした。胸に飾った大きな鏡が月光にも似た蒼い光を放っている。男はそれをとめている銀鎖が切れていないのを確認して、低く安堵の息をおとした。

「ここが黒富士か……」

蓬髪を掻きあげた手を懷に移し、背広の内ポケットにしまいこんでいる『死霊宝鑰』二巻の存在を確かめる。——どうやら、身につけたものはすべて、無事のようなだ。異次元への転移は成功した。男はこの三百年近く魔教が果たせなかった大業——黒富士入山をついに実行したのである。

男の名は、白鳳坊——。恐るべき妖術僧団苦止縷得宗の新しき盟主だった。

「さて……灼天尼と蒼禁坊はどこだ？」